

# 幼稚園・保育所語としての“お”ことば

池 田 一 郎\*

A Study about the Japanese Prefix “O” as  
Kindergarten and Day-care Center

Ichiro IKEDA

(1975年9月25日受理)

幼稚園・保育所で使用される所謂“お”ことばの乱用については従来多く論じられてきたところである。これはつぎの朝日新聞への投書欄から引用されたものが代表しているであろう。<sup>1)</sup>

去年幼稚園にはいった長男が「お汽車がシュッ・シュッ、お汽車がシュッポッポ」と歌っている。「お母さまお始まりになっちゃうよ」の“お始まり”をやっと聞きなれた耳にこんどは“お汽車”。変だと思われることばにもいつのまにかマヒしてしまう。ある奥さまの“お幼稚園”“お髪”“おミシン”なども聞きなればさきほど変にも感じなくなってきた。しかしこういう極端にバカでいねいな聞き苦しいことばは、おたがいの間から早くなくしたいと思う。まず先生がたが正しいことばづかいのお手本を示していただきたい。

現在幼稚園あるいは保育所の在籍者にさらに無認可の幼稚施設在籍者を含めてわが国幼児の殆んどをしめているとき、とくに最近3年保育が重視されはじめてからは幼児におけることばの問題が極めて重要になってきた。幼児が長期間にわたって幼稚園語を使用することは成人語への移行という過程で再検討を要するのではないかという点から幼稚園・保育所において多く使用されている“お”ことばについて考えてみたい。

## (1)

### “お”ことばが幼稚園に多い理由

#### (1) 幼稚園成立の歴史的條件

明治9年(1876)に東京女子師範学校に付属設置された幼稚園に始まったわが国の幼児教育は、明治12年に大阪府および鹿児島県にこれを模範としてそれぞれ幼稚園が設立された<sup>2)</sup>。これ以後昭和初期にかけては一部上流階級の子を対象としたものであり、上品なことば、しとやかな作法、かわいらしいこどもの育成を主眼としたものであり、“お”ことばを使用することによって特権階級意識を満足させるものとされてきた。このような時代のなかで幼稚園語は勢いでいねい語である“お”ことばが多くなったのは当然のなりゆきであった。

#### (2) 保育者が女性であること

育児は原則として母親が担当し、幼稚園・保育所の教諭・保母はすべて女性である。つまり言語形成の基礎時代は女性によってしめられている。このことは言語教育がたとい意的であるにせよ自然に幼児のことばを女性化してゆくことはいなめない。女性が保育

\* 社会科学研究室

の場以外で日常に使用していることばに“お”がつくものが多いことからこれは説明することができる。

### (3) 聞きとりやすさ

語頭に“お”をつけることによってそのあとの語幹部が聴取しやすい。語頭が明瞭でないときは語尾が不明瞭であるときよりも意志の伝達力は弱まる。幼児のことばは語頭の子音が脱落することが多い。ウマウマ・メメ・パパ・ママのような音節の反復された単語が極めて多いが<sup>3)</sup>、これらは一音づつ発声するか、“お”を語頭につけることによって発声することが聞きとりやすい。英語の幼児語にも mama—milk (milk) wau—wau—dog (dog) がある。おとなの会話でもつまったとき、つぎの語がでにくいときに意味のない母音を重ねることがある。「あのー」「えーと」「うーん」これは聞き手にとっても重要であるべきつぎの語を聞く態勢をとらせ、確実に聞きとらせる役割をはたしているといつてよい。

### (4) 一語文としての“お”ことば

幼児言語の発達段階としての一語文 one word sentence はやむをえない表現方法であり、かならず通過せねばならない段階である。この段階にある幼児にできるだけ文章を単純化し、こどもが進んで発表できる言語様式は当然のことながら許されねばならない。“お”ことばはこの単純化という意味では一語文としての要素を強くもっている。

帰りの用意をしましょうね——おかえり

椅子に座りましょうね——おすわり

教室に入りましょうね——おはいり

絵を画きましょうね——おえかき

集まって下さいね——おあつまり

動詞は連用形にして“お”をつけることによって名詞化されている。名詞の使用は Smith の調査をまつまでもなく幼児がもっともよく使用する品詞である。stress のある語に“お”を付加することによって文章的な広範な意味が付与されることになる。これらの点から“お”ことばは単純化された一語文としての意義をもち、幼児の発達段階に適合したものとなる。

### (5) 幼児語から成人語への過渡段階としての“お”ことば

幼児語から成人語に移行するのは2歳ごろが多いが、そのときおとなは何の意図もなく自然に成人語と、それに対応する幼児語を対にして話すことが多い。

ブーブー→ジドゥシャブーブ→ジドゥシャ

ポンポン→オナカポンポン→オナカ

これが成人語への移行を促すのに大きい効果をあげていることは村田<sup>4)</sup>が示している。このとき幼児語から脱脚させるためにひとつの過程として“お”をつけることは成人語を自然に理解させるために必要ではないであろうか。

クークー→クチュ→おクチュ→おくつ→くつ

ミーミー→おミカン→みかん

パイパイ→オッパイ→おチチ→乳

ブーブー→おブー→おみず→水

幼児語には onomatopoeia が多く、成人語への道程として成人語を発音しやすくしたものが多く、正しい成人語と幼児語の中間的存在としての“お”ことばを使用することは幼児の言語指導のうえで必要なことである。

しかしここに考慮すべきところがみられる。“お”のことば濫用はもちろんさげねばならないところであるが、当然つけるべきところにはつけなくてはならないし、つけてはならないところには使用してはいけない。しかし幼児にとってはつけるべきかつけないのが正しいのかは区別のできないところに問題が存在する。それは接頭語“お”と、おで始まることばとの区別が不可能な点である。接頭語“お”がついている語か、おで始まっているだけで語幹であるのか、または文法的には接頭語であっても省略することができないまでに語幹に組み入れられているのかを区別することは幼児の段階においては極めて困難である。

“おもち”をひとつの単語として耳から理解している幼児が字が読めるようになって、もち(餅)という2字をみて“お”が抜けていると考える例がみられた。これは3字語と2字語の対応関係を幼児が理解しはじめた結果である。

語頭がおで始まるもの

鬼が島、起きる、おんどり・おとこ・おんな・おとな

接頭語“お”が語幹に組み入れられているもの

おてだま・おにぎり・おぼけ・おやつ・おひる

このようなあいまいに誤った用法の“お”を理解させることは不可能であるため、“お”ことばを完全に否定するか肯定するかについての論議は速断を許さない。

## (2)

### 幼稚園・保育所での“お”ことばをどのように考えるべきか。

幼稚園・保育所での“お”ことばはわが国では多く使用されており、しかもその理由は前述したように複雑な根拠からきている。したがってこの使用はすべて是認されるべきものでもなく、またすべて否定されるべきものでもない。正しい日本語成立への過程としての“お”，児童の心理的発達段階に応じた“お”は当然維持され指導してゆかねばならない。現実に幼児の言語指導の場において具体的にひとつひとつ取捨選択してゆく必要がある。言語しつけ時代から言語による社会適応時代に入った時代では、こどもに言語経験を豊富に与え、成人言語を使用できる能力を早くつけさせることによって社会に適応させようとした。これは話すことが中心で、こどもの一方的主張を重視し、成人言語を表面的に使用するだけで真のことばの意味を理解しない形式的な活動を重んじた。

現代の言語機能発揮時代は必ずしも社会適応を急がせることなく、ことばのもつ意味を充分理解させ、ことばの働かしを完全に発揮させることによって人格形成をさせ、聞く→話す、話す→聞くのフィード・バックによって自己の思考を高めてゆかせるもの、ことばを変えていうならば、話し手の心を把握することによって相手にわかることばを伝えることを意味している。

このような観点から、幼児の理解できることばを与え、この積み重ねをくり返すことが幼児の言語指導である。ともすれば従来“お”ことばが上品ぶったことば、可愛らしさを強調することばとして成人語学習の手段としては否定的であったが、言語形成期に喃語→幼児語→“お”ことば→成人語の過程を着実にたどらせることは重要なことである。対人

関係が小範囲で積極的な学習がなされない家庭よりも集団保育の場である幼稚園・保育所に植ける言語教育の優位性が重視されねばならない。これは聴覚障害児教育での「ことばの風呂に入れる」ということと軌を一にしている。

発達水準に応じた幼児語を適当に利用することによってこれに習熟すれば更に正しいものに移行してゆくという意味で“お”ことばは成人語習得への一段階である。

村田<sup>5)</sup> のように、いったん獲得された語は永久に自分の言語的財産となり、その後はいつまでも使うことができるというものではなく、幼いこどもは一度用いられた語が後に用いられなくなって消えてしまうことが例外ではないとすることからもこれは正しい方法といえる。

こどもがチャルといえは「そうおサルね」と自然に“お”ことばに導入し、さらにおサルとサルの対応関係を識別させ、正しい発音に導いて、“お”を取り除いても発音できるようにしむけていくことである。もしそうでなければ幼児語の段階にいつまでも停滞し依存的で所謂 psychological weaning は不可能であろう。

#### 文 献

1. 幼児の言語指導, 教師養成研究会幼児教育部会, 学芸図書.
2. 幼稚園事典, 千葉出版株式会社.
3. 保育ハンドブック, 碓井隆次他, 六月社.
4. 児童心理学, 村田孝次, 朝倉書店.
5. 児童心理学, 村田孝次, 朝倉書店.

#### Summary

In this paper the author deals with the problem of the Japanese prefix—O—as Kindergarten language, which is considered to be a peculiar language spoken among children in Kindergarten or Day-care Center.

The prefix O is a kind of special nurse language, which is used in teaching children how to speak individually or in a group, in the course of the development from babbling to child language and from child language to adult language. Although this problem has been considered for years whether the prefix—O—may be useful or may not, the problem concerning the choice of this prefix has been hardly mentioned in the communication between children and adults.

This thesis may shed light on the way and the process of changing from child language to adult language when the prefix—O—is dropped.